

異質な画家カラヴァッジョ イタリア

初代国立西洋美術館長の富永惣一先生にお目にかかったおり、絵画鑑賞は難しく考えるな、見たまま感じたままでもよろしい。それと話題が美術の話に及んだ時に理解ができるように勉強しておくことが大切だと諭された。

以来勉強の心算で画集を開き展覧会へ足を運ぶなどしていた。そしていつの頃からか絵を見るのが楽しみになり、海外へ出かけたおりには寸暇を割いて美術館に行くようになった。絵に深い知識を持っているわけではないが、画集で見ていた絵の実物を目の前にすると、普段感じる心が無い心ときめきを感じ、満ち足りた気持ちになるのである。

というわけで絵を眺めるようになって久しいが、常々不思議な人物だと気になっている画家がいる。イタリア人のカラヴァッジョである。

絵を描くに何も品行方正でなくてはならない決まりなどないが、人を殺める大罪を犯し、素行も芳しくない人間が、素晴らしいイメージを膨らませ、それを絵筆で描きだし人を感動させ、随分破天荒な人生を送りながら名画を数多く残している。それがカラヴァッジョであり、その作品は今に至るも人々を引き付けてやまない。

多くの著名な画家は幼少の頃から天分の才を認められ、優れた師に学び大成して行くが、カラヴァッジョはそういう人とは異なる道を歩いている。人物像を端的にいうと、いい方は悪いが、世の中のはみ出し者である。歴史に名を留める様な人物に抱いているイメージとは遠くかけ離れた人物なのである。今風にいうなら絵を描く技量が無ければ単なる無頼の徒である。

余談であるがカラヴァッジョについて書かれた文献を見ているうち、ミケランジェロが何々をしたと書かれているのを見て、最初これはミスプリか著者が何か勘違いしているのかと思ったりした。読み進むうちにやっとカラヴァッジョの苗字がミケランジェロであることに気づき、迂闊さで顔がほてった。

ミケランジェロ・メリージ・ダ・カラヴァッジョ（1571年～1610年）は3人兄弟の長男として侯爵家の邸宅管理者である父親と地主の娘である母親との間に誕生している。

ルネッサンスの後半に登場するイタリア人画家であるが、20歳頃からローマ、ナポリ、マルタ島、シチリアなどを転々としている。放浪の画家と言うと聞こえはいいがそうではない。行く先々の土地土地で悶着を起こし、やむなくその都度逃げるようにして居を移しているのである。

ミラノで師匠について画家の修業を積み、悶着を起こしローマへ行き、画家の工房で働くようになり、ここで技量のみとめられる

も1594年工房を解雇され画家として独り立ちした。

美術愛好家らの間では描く技量を高く評価されていく。

カラヴァッジョの絵画は写実主義に貫かれ、理想化したり修正をくわえたりせず目に見える通



キリスト埋葬 ヴァチカン美術館



女占い師 カピトリノ美術館



病めるバックス
ボルゲーゼ美術館



イサクの犠牲 ウフィツィ美術館



メドゥーサ ウフィツィ美術館

りに描いていく方式であった。1600年の作品“聖マタイの殉教”“聖マタイの召命”はカラヴァッジョの名を一気に高めることとなった。

目を見た実物通り描く画家として大層な評判を得ていくに従い、制作依頼が引きも切らさず来るようになったが、一方では品性に欠けるなどといった批判もあった。

平凡社ライブラリー「カラヴァッジョ伝記集」石鍋真澄編訳の中に“カラヴァッジョの肖像”の写真



ホロフェルネスの首を切るユディット
バルベリーニ国立美術館



ダヴィデとゴリアテ
ボルゲーゼ美術館

が掲載されている。面構えは偏屈と言うか私の強そうな逞しい印象である。ローマのボルゲーゼ美術館を訪れた時、オヤこれはどこかで見た顔だと思った瞬間、ダヴィデが髪の毛をつかんでいる生首の顔は、カラヴァッジョ自身の顔ではないかと気づいた。

カラヴァッジョの絵は写実的であるといわれている。絵の中に自身の顔を描いたり、モデルが誰か判るものもあるようだ。マグダラのマリアを描いたときには顔を広く知られている娼婦をマリアの

モデルとして描き、絵を発注した教会から納品したが受け取りを拒否された作品もある。



パラフレンエーリの聖母
ボルゲーゼ美術館



ロレートの聖母
サンタゴスティーノ聖堂



洗礼者ヨハネ
カピトリノー美術館

カラヴァッジョは普段の生活でも喧嘩沙汰は日常茶飯事、暴力沙汰の明け暮れであったが、大目に見られていたのは画家としての技量もさることながら、多くの有力者がパトロンとして支えていたからだともいわれている。

だが、遂にはローマで若者を殺害し追われる身となり知人の騎士団員を頼ってマルタ騎士団の本拠地マルタ島へ逃げ込む。

騎士団の守護聖人ヨハネに捧げられた聖ヨハネ大聖堂に付属する美術館には、ここへやってこなければ見ることのかなわない大作“聖ヨハネの斬首”がある。

カラヴァッジョはマルタ島でも喧嘩沙汰を起こし、騎士に重傷を負わせ牢獄に閉じ込められ、騎士団から除名されたが破獄しシチリアへ逃れる。だが品行は改められずここでも悶着を起こしナポリへ渡る。ナポリでは何者かに襲われ大怪我

をする。ナポリで描いた洗礼者ヨハネの首を持つサロメの生首も自身をモデルに描いている。人を殺害したことへの許しを請うためにローマへ向かうもトスカーナまでやってきて熱病にかかり38歳の若さで没する。一説では鉛中毒で死去したのではないかともいわれている。



左：悔悛のマグダラのマリア
右：エジプト逃避途上の休息
ドーリア・パンフィーリ美術館